
STUDY ONE ～中学生の学習支援～

第1章 プロジェクト概要

1. 「STUDY ONE～中学生の学習支援～」

伏見区を中心に、子どもたちが安心して学習できる空間をつくる活動を行う。

2. 代表者及び構成員

・代表者

下西紀輝 社会領域専攻 2回生

・構成員

鳴橋杏里 国語領域専攻 4回生

深津勇斗 理科領域専攻 4回生

松田凌 数学領域専攻 4回生

戸高雛 教育学専攻 3回生

今川裕也 教育学専攻 1回生

立花麻衣子 教育学専攻 1回生

森田開一 教育学専攻 1回生

稲岡言美 国語領域専攻 1回生

梨木悠 国語領域専攻 1回生

芦田愛依 英語領域専攻 1回生

白波瀬翔太 英語領域専攻 1回生

田中海里 英語領域専攻 1回生

西田光 家庭領域専攻 1回生

3. 助言教員

伊藤悦子先生（教育学科）

第2章 内容や実施結果など

1. 放課後学習教室 STUDY ONE

時間：毎週金曜日 18:00～20:00

場所：伏見いきいき市民活動センター

STUDY ONEの主たる活動は、この「放課後学習教室 STUDY ONE」という学習支援中心の放課後教室を開催することである。中学生を対象に呼びかけをし、学習に適した環境づくりを行う。今年は1回生が9人参加したことでこれまでよりも規模が大きな呼びかけを行った。藤森中学校と連携をしており、今年度は1年生が2人、2年生が7人、3年生が8人登録した。毎週の活動には10人～15人程度参加している。また、高校生が2名程度参加している。毎回の活動では、子どもたちが持ち込んだ宿題や本団体が所有する参考書などに中学生が取り組む。大学生は中学生が分からないところを教えたり、学習方法を提示したりする。

STUDY ONEでは、学習に適した環境づくりというのを意識した。可能な限り1人～2人の中学生に大学生が1人はつくように心掛けた。また、中学生には決まった大学生がつくように心掛け、関係の構築に努めた。さらに、今年度からは小さなグループに分かれて学習を行う「島制度」を始めた。

藤森中学校との連携も行っている。子どもへの呼びかけなど、学校側と連絡を取り合うことで子どもをより包括的にサポートすることができた。

2. 他団体への視察

(1) 「あわじ寺子屋」

大阪府東淀川区で行われている「あわじ寺子屋」近辺を視察してきた。「あわじ寺子屋」は元西淡路小学校で開催されている放課後学習支援教室である。今回は西淡路小学校近辺のフィールドワークを行った。

(2) 幸重忠孝さん

2月21日（金）に特定非営利法人こどもソーシャルワークセンター理事長 幸重忠孝さ

んの話の伺いに行く予定である。幸重さんは、京都での子どもの居場所づくり支援の第一人者であり、山科醍醐子どもの広場の前理事長でもある。子どもたちの抱える「困り」の枠組みと基盤づくりの仕方や、「困り」の実態と地域とのつながりなどについて学ぶ予定である。

3. シンポジウム等への参加

(1) 基礎教育保障学会

9月1日(日)に京都教育大学で行われた基礎教育保障学会に参加した。本学会は困難な状況にある子どもたちの基礎教育保障などがテーマであった。学会では、夜間中学の展開や日本語学校など、放課後学習支援活動以外の基礎教育保障の在り方を知ることができた。

(2) ユースシンポジウム 2019

10月6日(日)に京都市下京青少年活動センターで開催された「ユースシンポジウム 2019 学習支援事業の現在地—10年目の成果とこれからを考える—」に参加した。本シンポジウムは京都市からの委託事業として10年目を迎えるユースサポートの活動の軌跡とこれからの展望について考えることを目的としていた。元々ケースワーカーや学生団体がボランティアに始めた学習会は、京都市委託事業となり、年々拠点や対策を増やし現在、市内18拠点で実施している。

今回のシンポジウムでは、全体でパネルトークを行った後に分科会として大きく4つに分かれた。その後、市内各地の放課後学習支援を行っている人々と活動について意見交流を行った。

4. 研究会

3,4回生と伊藤先生を中心に研究会を7回

企画した。これまで開催した5回は、STUDY ONE が対象とするテーマに関わる論文や書籍の一部、映像などから「子どもたちが抱える『困り』」や「居場所づくり・学習支援」などについて読み解き、構成員同士で意見を交流した。

第3章 結果や成果など

1. 放課後学習教室 STUDY ONE

STUDY ONE で子どもたちに勉強を教える中で、子どもたちが自身の学習をマネジメントすることに困難を抱えていることが分かった。STUDY ONE に参加してくれている子どもたちは勉強に対して苦手意識を抱いている子が多い。昨年度でも同様の課題となったが、勉強に対して自虐的な発言が多いように感じる。これは子どもたちが勉強に対してハードルを高く感じているためだと思われる。

STUDY ONE に参加してくれている子どもたちと接していると、彼ら自身も勉強はやらなければならないと自覚していることが分かった。しかし、勉強に対するハードルの高さ、「どうせ…」といった自己肯定感の低さが彼らの学習意欲を妨げていると感じた。

今年度から実施し始めた島制度は、グループ間によって物理的にも、精神的にも一定の距離を設け学習に集中しやすい環境をつくることを狙いとしている。この狙いは成功したが、一方で集中が切れてしまった子がいると教室全体が騒がしくなってしまうこともあった。静かな環境にはなりやすいが課題がまだあると感じている。

中学3年生が8人いるため、高校入試対策を行っている。大学生の考える受験対策開始時期と中学生の実感している高校受験の開始時期に違いが生じている。中学生と接する中で志望する高校を聞き取り、大学生同士で共有を行った。高校進学は8人すべての3年生

が希望しているが、モチベーションは子どもによって異なる。また、中学生と接する中で彼らが彼ら自身の考えで志望している高校に進学したいと考えているかは疑問に感じるがあった。高校についての情報を提供する機会をこれまでよりも設ける必要があるように感じた。

高校進学については、志望する高校の過去問題などを解いたり、公立入試の赤本などで対策しようとするが、入学試験のレベルまで学習が定着していない中学生もいる。限られた時間の中でどのように勉強をサポートできるか課題である。

2. 他団体への視察

今年度は視察の回数が十分だったとは言いがたい。フィールドワークの実施や専門家への訪問といった企画は出来たが、来年度はより綿密に予定を合わせて企画したい。

3. シンポジウム等への参加

基礎教育保障学会とユースシンポジウムへの参加で基礎教育保障の変遷と現在の状況、展望について大まかではあるが知ることができた。また、基礎教育保障といった枠組みで活動されている他団体の取り組みや意見を交流する機会が得られたことは貴重な機会であった。一方でシンポジウム等への参加は構成員の多くが参加していたと言いがたい。放課後学習教室や研究活動以外の活動に対しても高い参加を求めるように働きかける必要がある。

4. 研究会

5回に渡って開催してきた研究会によって、大学生の知識の補充や意見の交流を行うことができた。第4回勉強会ではKJ法を用いてテーマを設定したうえで書き出しを2つのグ

ループに分かれて行った。すると、どちらのグループも多く的事柄を書き出し、グループ分けをすることができた。第7回勉強会では各人がKJ法によって出てきた興味あるテーマを基に事前に調べ学習を行い、レポートの提出と発表を行う予定である。

第4章 まとめと反省、今後の展望など

今年度は登録した中学生が、途中で退会することはなかった。途中来てくれる頻度が下がる子はいたが月に1回程度は教室に来てくれている。このことはSTUDY ONEが中学生の居場所として機能していることを示している。

今年度は現在まで、約40回教室を開催した。毎回約10人程度中学生の出席なので、延べ400人の中学生が参加したことになる。また同様に大学生も毎回10人程度出席しているため大学生も延べ400人参加したと考えられ、中学生と大学生との交流の機会が設けられたこととなる。

しかし、子どもたちにとってよりよい教室づくりという点ではまだ多くの課題、改善点が存在する。今後学生内での情報共有を徹底し、子どもたちがまた来たいと思えるような教室を目指す。

また、中学生の勉強へのモチベーションを高めるために大学生がどのように働きかけることができるのかについて、視察、講演会、学会等への参加、STUDY ONE内での意見交流などから探っていきたい。